



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

1. 抜錨編〈下〉

ALPHA POLIS LIGHT

柳内たくみ

Takumi Yanai

ALPHA POLIS 文庫



主な登場人物

Main Characters



シャムロック・ハ
エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



ケミイ

海で暮らす
アクアス族の女性。
人魚のような特徴を持つ。



徳島甫
とくしまははじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



ヴォイ・ド

ティナエ諜報機関
『黒い手』の一員。
プリメーラの船に乗り込む。



オデット・ゼ
ネヴユラ

翼皇種の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田島五郎
えだしまごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

エドモンド・チャン …… 特地碧海で行方不明となったジャーナリスト。

黒川雅也 …… 海上自衛隊の潜水艦『きたしお』艦長。

藤堂鉄男 …… 日本国の外交官。

アマレット …… プリメーラ付きのメイド長。

カイピリーニャ

エム・ロイテル …… ティナエ海軍海佐艦長。

キュラソー …… ティナエ海軍海尉。

イスラ・デ・ピノス …… シャムロックの秘書を務める巫人種。



シュラ・ノ
アーチ

帆艇アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺



●ロンデル

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

エルベ藩王国

グラス半島

トユマレン

アヴィオン海

碧海



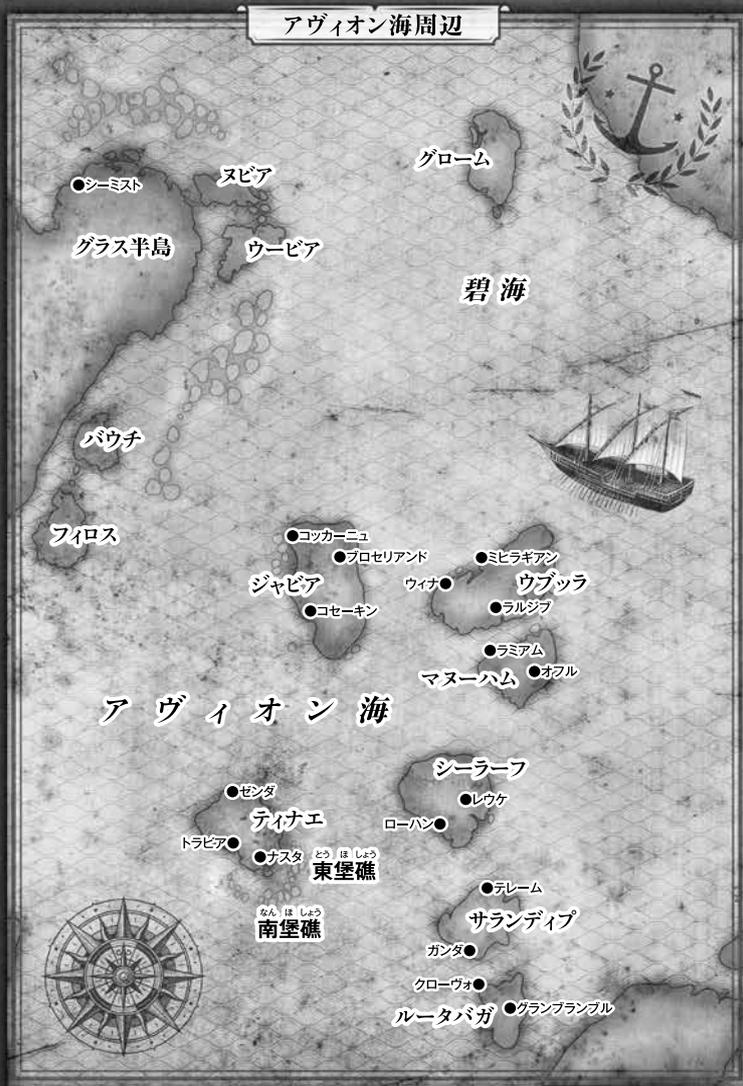
09

艦長が乗り込むとオデット号出港の準備は更に進んだ。
水、食糧品が詰められた樽たるが運び込まれ、翌日にはついに漕役奴隷そうやくにせ達がやって来たのだ。

奴隷達はヒト種、モリス種、人狼種、肌が青かったり赤かったりや種族こそ様々だが体付きのしっかりしている男性に限られていて、三人一組で足首を鎖に繋いでベンチに固定される。その三人で一つの漕オトルを漕ぐのだ。

オデット号は片舷二十丁、合わせて四十の漕がある。つまり漕手こては最低でも百二十人が必要だ。それを三隻分、ティナエ政庁は当初から三日遅れながらも、なんとか掻き集めることに成功したのである。

オデット号の乗組員はこれで副長、士官、下士官達、水兵の二百四十名に漕役奴隷百二十名、海兵二十四名が加わる。更に艦長と艦長が連れてきた従卒、艇長が加わるか



ら、狭い船には四百名近い男達が詰め込まれることになった。

そんな中、徳島はその四百名の腹を満たすための厨房に配置された。

料理の技術の基礎というのは時とところが変わっても基礎的な部分で大きな違いはない。料理が出来ますと自己申告した徳島を、司厨長が試験して即戦力になると判断したのである。

「次席司厨員がマゼンダ号の司厨長として引き抜かれて手が足りなかったんだ。お前が末席を担当しろ」

とはいっても、徳島が担当することになったのは乗組員用とは別に作られる奴隷食だった。

そして徳島と一緒に志願した形の江田島とチャンも厨房助手を命じられ、倉庫から食材を引っ張り出してきたり奴隷食の配膳といった仕事を担当することになった。

おかげで彼らは、日に二度（奴隷の食事は一日二度である）權漕の訓練に疲れ果てた奴隷と接するようになった。

「この世界は何もかも遅れている。人権つてものを啓蒙してやらないといけないな。お前達はそうは思わないか？」

そんなこともあつてかチャンは憤懣やる方ないといった様子で、乾燥した黄豆を真水

の入った鍋に放り込んだ。

「人間の価値観を変えるのは簡単じゃないと思うけどなあ」

徳島はエン麦を鍋にざざっと流しこむと、煉瓦で作られた竈で火に掛ける。

「それでも、それをするのが俺のようなジャーナリストの仕事なんだよ。それとも、お前達は奴隷制に賛成なのか？ エダジマ、お前もそうなのか？」

奴隷用食器を洗っていた江田島が言った。

「どんでもない。私達は奴隷制に大反対です。更に言えば私は日本国憲法を遵守することを宣誓している自衛官ですから、人権を重視する姿勢についても概ね貴方と同じ意見を持っています」

「だったら賛成しろよ！」

「しかしながらそれは国境線の内側でのこと。他国にこちらから出かけていって我々の価値観を押しつけることについては消極的であるべきだと思います。物事の考え方は、時や所によって異なるものですからねえ」

「事なかれ主義者め！ 不正を見て手を拱いているのは、それを認めているのと同じなんぞぞ！」

「これは私の個人的な見解として受け止めていただきたいのですが、様々な文化や考え

方を持つ人々と共存する秘訣とは、相容れない価値観を相手を持つことを許容し、干渉しないことではないのでしょうか？ 価値観が違っていることをまず認め、互いを脅かさないうような心理的、あるいは物理的な境界を作って礼儀正しく棲み分ける。もちろん相互の交流によつて信頼を築くことも大切ですが、踏み込み過ぎないこともまた平和を実現させる上では大切だと私は考えます。様々な形での交流の結果、我々の考え方、感じ方にこの世界の方々が感化され、例えば人権思想が芽生えて奴隷制度を廃止しようという潮流が生まれたなら、これ以上の喜びはないのですが、こちらからあえて出かけていって余計なお節介や干渉をすると、きつと争いを生むことになると思います」

「今、目の前で起きている悲惨や悲劇には目を瞑れつつか？」

「行動した結果、さらなる悲惨や悲劇を引き起こす恐れがありますから慎重になりたい。それが『先住民文化保護国際条約』の基本精神でしたよね？」

「う、それはそうだが……」

『門』が再開通して特産と銀座との間の往来が回復すると、ほどなくして国連で先住民文化保護国際条約が提唱された。

それは特産先住民の生活や価値観を保護するためと称し、技術や知識、生産設備の移転を禁止し、人件費の安い特産で工業製品を作るなどのメリット利用を大幅に制限する

ものであった。

もちろんその背景には、「日本に一人勝ちはさせない」「自分達が利用できない特産ならば、ルールを作つて利益を得る道を制限する」という欧米流の狡猾な意図が含まれていた。しかし先住民文化の保護という耳心地のよいフレーズに各国のマスコミが乗り、これを推進する記事を盛んに書き立てた。チャンの属するニュース・ジャーナル社もまた、この条約を熱心に推奨するキャンペーンを張つたメディアの一つだったのだ。

もちろん日本政府も欧・米・中のそんな意図はお見通しである。

ルールを作る。そして自分達は抜け道を探る。そうすることで利益を貪つてきたのが彼らのやり方なのだ。しかし結果としては、日本もこの国際条約に加盟、批准した。

それは同種の結果をもたらす協定交渉が、『門』を管理することとなった五神殿会議との間で進められていたからで、国際条約によつてそれに縛られるのが日本一国だけでなく全世界が同じラインに立つたならば、『門』を銀座に持つ優位性が損なわれないと踏んだからなのだ。

「チャンさんはアメリカの国籍をお持ちなのですから、南北戦争の死者の総数をご存じですよね？」

「……」

「直接の戦死以外にも含めるなら、七十万から九十万人说われています。南北戦争は別に奴隷解放のためだけに引き起こされた戦争ではありませんが、とはいえ重大な要因になったことも間違いありません。奴隷解放という理想のためというものの、これほどの犠牲が出たことを我々はどう考えるべきでしょうか？」

「必要な犠牲だった……とは思わないのか？」

「少なくとも見積もって七十万の死、七十万の悲惨、七十万の家族の悲しみは、奴隷制度という悲惨さに比べて軽いと貴方は考えるのですね？」

「そ、そうは言わないが……しかし……」

「貴方が、自分の価値観や正義感に基づいて行動したいとおっしゃるならそれはそれで結構です。しかしながらご理解いただきたいことがあります。アメリカ流の自由とか権利といったものは、アメリカ軍が守る勢力圏の内側でのみ通用する概念だということです。この特地では貴方の生存権すら確保するのは難しい状況です。ですから、どうぞ自分の置かれている立場だけはお忘れにならないようお願いいたします」

「理想は理想を言える国ではかってか！ くそっ！」

憤ったチャンは、厨房の床に唾を吐いた。

「チャンさん……貴方は困った方だ。今言ったばかりなのに」

それを見て徳島と江田島は嘆息した。

「何がだ!？」

チャンは問うたが、理由はすぐに判明した。

「貴様、そこで何をしているか!? 神聖な厨房で唾など吐きよつて!」

いきり立った司厨長が大股でやってきて、チャンを小突いたのである。

テナエの海軍下士官達は、陸者には優しく言っても分からないから身体で躰けなければならぬと固く信じている節がある。チャンは身をもって自分が何をしたのか、そして何をすべきなのかを学ぶことになったのである。

チャンが甲板の床掃除をさせられている。

「わっしょい、わっしょい」

甲板の床に水を撒き、掛け声に合わせて椰子の実を半分に分ったタワシでこすり擦る。擦るといよりは削るといった方がよいほどに力を入れることを求められるのだ。

チャンを止められなかった同じ厨房班員も同罪ということで、徳島も江田島も一緒だ。「俺達まで罰をくらっちゃいましたね……」

徳島が余り嫌がってなさそうな口ぶりで言った。

江田島は辛そうである。

「これが連帯責任というものです。同僚に対する責任感と自制心を養い、団結を高めることが目的……と理屈では分かっているんですが、この歳になるとさすがに応えませぬえ」

しゃがんだ姿勢でのこの作業は見た目以上にキツイ。おかげで江田島は何度も何度も膝を突いては強張る腰を自ら拳で打たねばならなかった。しかし、そんなものよりも更にキツイのは他の厨房班員からの冷たい視線だった。

徳島と江田島は別によいが、チャンの事情を知らないこの世界の乗組員はかなり深刻にチャンを恨み、睨み、無言の圧力をかけていた。それこそ眠っている間に拘束されて石鹸を包んだタオルで乱打されそうなほどに。

掌帆長と司厨長は、そんな徳島達の姿を他の水兵達に見物させながら告げた。

「お前達！ この情勢下で海軍に志願した勇敢さは褒めてやる。だが、規律を無視することは許さん！ 奴らのこの様を見ろ！ 神聖な甲板を穢す奴は誰であろうと罰せられるのだ。忘れるな！」

その時、命令が出た。

「玄門前に整列！」

乗組員達は再び甲板上に整列させられた。

掃除中だったチャンももちろん例外ではない。甲板全面を掃除させられるのに比べべら整列するくらいなんてこともないので、チャンは水を得た魚のように椰子のタワシを放り出して堵列に加わった。

「これより酔姫様がご乗艦される。お前達、粗相のないようにしろよ」

警衛係下士官の訓戒の後、艦長が士官達を引き連れてやってくる。

そして最高の礼儀を示す態勢を整えると、オデットに案内されてプリメーラ姫が舷梯を渡ってきたのである。

号笛が吹鳴され、乗組員達が総出で堵列する中で酔姫プリメーラが艦に乗り込んできた。プリメーラは船に慣れていないのか、それとも二つ名が意味する通り酔っているのか、足取りがいささか危なげなため、舷梯から甲板に降りるのにも、眼帯をした男装女性の介添えを必要としていた。

プリメーラが無事に乗り込むと、早速キュラー艦長が前に出て恭しく頭を下げた。

「お待ちしておりました、プリメーラ様」

若い青年の登場にプリメーラは驚いたように目を瞬かせた。

「貴方がカイピリーニヤ艦長？」

「いえ。私はキュラソー・ノ・オレンジです。当艦オデット号の艦長に任せられました」

「そうでしたか？ では、よろしくお願いたしますね、キュラソー艦長」

「では姫を貴賓室にご案内いたしますよう」

艦長の案内でプリメーラが艦尾楼の貴賓室へと向かう梯子段を降りていった。

この艦では艦尾楼の最上階に艦長室、そしてその下に貴賓室がある。狭い船の中で大して広くもないのだが、一人きりになれる個室を持てるのは艦長かあるいはプリメーラのような貴賓くらいなのだ。

残された水兵達には「わかれ」の号令がかかって解散となる。実にあっけないが儀式はこれで終わりであった。

「統括、今がチャンスです！」

「分かつてまず、徳島君」

徳島はこの瞬間を逃げ出すチャンスと見ていた。

舷門には見張りの海兵が立っているが、プリメーラに随行する吏員達が次々と荷物を運び込んでくるため、その往來を黙って見守るだけになっている。棧橋を見張っていた

『黒い手』の姿も見られない。

「お、おいつ!? 何するんだ？」

二人はチャンを両脇から抱えるようにして舷門へと向かった。チャンは、突然のことにどう反応してよいのか分からないようであった。

「今です。今が逃げ出す好機なんですよ、チャンさん」と徳島。

「お前達の荷物は!？」

「そんなもの気にしてどうするんです？」と江田島。

三人は荷物を運搬する吏員達の列に紛れると、舷梯に足を掛けた。

舷門の当直者はそんな三人を荷物の積み込み支援を命じられていると思ったようで、黙って見ているだけ。あと少し、あと少しでこの船から脱走できるのだ。

しかし思わぬ声が横合いから投げかけられた。

「ああ君達、ちょうど良かった。姫様の荷物を運んでくれたまえ」

聞き覚えのある声にぎよつと振り返ると、三人は凍り付いた。

「あっ!」

「貴方達は……」

そこにいたのはティナエの防諜機関『黒い手』のオー・ド・ヴィだったのである。

「お前達を逮捕するので。大人しくしないと殺しますよ」

などと叫んで、オー・ド・ヴィは一人で徳島達三人に掴みかかったりはしなかつた。

少年のような体格のヴィ一人で、大の男三人をどうにか出来るはずもないとのっけから諦めているのか、徳島と江田島を見るなり「ここに逃げ込んでいたのですか」と深々と溜め息を吐いたのだ。そして改めて三人に衣装櫃トラックケースを運ぶよう求めた。

立ち尽くす徳島と江田島に向けてチャンは言った。

「おい、逃げるんじゃないかかったか？」

「ど、どうしよう？」

徳島は迷った。

今、逃げ出そうとすればヴィは舷門を監視する当直者に通報するだろう。

まだ、この埠頭周囲にも『黒い手』の要員が配置されている恐れもあるから、船から降りた途端、捕らえられてしまう可能性は高い。

そんな中、江田島が告げた。

*
*



「徳島君、ヴィさんの言う通りにしましょう。チャンさんもお願いたします」
 事が露見したにもかかわらず騒ぎ立てようとするヴィの真意を確かめるため、徳島達はしばし彼の求めに応じることにした。

「しようがねえなあ」

チャンも渋々従う。重い木製の衣装櫃を運びながら徳島はヴィに尋ねた。

「一体、どうしてここに君が？」

ヴィもまた重い衣装櫃を抱えて棧橋から艦へと舷梯を渡る。

『「黒い手」の上層部に、姫様一行に加わるよう命じられたので」

「なんでそんなことに？」

「他人事のように言いますね？ 貴方達を止めることも、捕らえることも出来なかった責任を問われたからに決まっているじゃないですか!? それで、姫様付きの随員に加わることになったんです。要するに追放処分ですよ、これは……」

「ティナエの防護機関も仕事が早いんだねえ」

「私だってそう思います。もしかしてこのことは、最初から決まっていたんじゃないか。貴方達の企みを防げなかった責任というのも後付けの理由なんじゃないかと疑いたくなってくるほどです」

というか、ヴィは完全にそうと決めつけている顔付きだった。それがヴィらしからぬ——というほどの少年のことを知らないが——屈託溢れた振る舞いの原因である。

「そうなんだ。それで俺らをどうするつもり？」

「別に。もう私の管轄ではないので好きにしています。ええ、勝手にしてください。貴方達がどう振る舞おうと、酔姫の随員でしかない私の知るところではありません」

少年は憤懣を表すように唇を失わせる。

「じゃあ俺達……逃げていいかな？」

「ダメに決まっています。今逃げられたら、私一人でこんな重い物を全部運ばなきゃいけなくなるじゃないですか！ そんなことしたら貴方達を殺しますよ」

振り返れば、棧橋にはプリメーラの物らしき衣装櫃、木箱、樽などが十個あまり置かれていた。さすがに華奢な少年一人にそれを全部運べというのも酷な話である。

「あ、そりゃそうか。ならさ、それを全部運び終えてからならどう？」

「もちろん、好きにしてくださいさって結構です」

「騒ぎ立てたりしない？」

「今更貴方達を捕まえたところで、追放処分が解けるわけじゃないので……」

仕方なく徳島と江田島とチャンは、三人がかりで重い衣装櫃を持ち上げ、プリメーラに宛てがわれた貴賓室へと運び込んだのである。

艦と栈橋を何度か往復して、船倉への衣装櫃の搬入もようやく終えた。これでやっと船から降りられると梯子段を上って艦尾楼甲板に上がると、オデットの声が三人の耳に聞こえた。

「キュラソー艦長。航路の安全を確認。エウーロとボレーが共同直で風を吹かせている（北東の風という意味）。夕方近くには四柱の女神達が直をたらい回しにするから、風上は四方をぐるりと巡ってその後、夜には弱まってしまうのだ」

「ご苦労オデット。出航するなら今のうちということだな！ 見張りは旗艦ガリー号をしつかりと見張れ。信号旗を見逃すなよ！」

後尾楼甲板の様子はすっかり変わっていた。艦長や副長、航海士といった主立った者達が揃っていて物々しい雰囲気包まれている。

「艦長。旗艦に出航旗が上がりました！」

江田島は、艦長と副長のやりとりを聞いて舌打ちした。

「しまった……」

「どうしたんです、統括？」

「出航準備の配置がかかっています」

直後、出航準備、つまり総員配置の命令が発された。

この命令が出たら、当直中の乗組員はおろか非番の者も含めて全員で配置に就かなくてはならない。こうなるとどこに行っても他人の目があり、逃げ出すどころではなくなるのだ。

もちろん徳島達も配置時にいるべき場所がそれぞれ指定されている。幸い三人とも、この世界の船については何の技術もない陸者という区分を受けているので、まとめて全員が錨鎖巻き上げ機に配置され、掌帆次長の合図でそれを動かすのが仕事となる。

「よし、野郎共、力の限り回せ！」

「くおおおお……」

重い錨を海中から引き上げる巻き上げ機は、様々な場面で流用される。今回は、クレーンから伸びている索を巻き上げるのが彼らの仕事だ。栈橋と艦とを繋ぐ舷梯を釣り上げるのである。

やがて栈橋の係留柱から舳綱も解かれた。

「発航せよ！」

艦長の命令を受けた副長が、その命令を実現するための具体的な指示に翻訳する。
 「両舷漕ぎ方始め！ 前進微速！」

最下層甲板にある漕役室から木槌を叩く音が響き始めた。するとその音に調子を合わせるように舷側から突き出た櫂が一齐に動き出した。櫂が揃って水面を叩く。そして前から後ろへと向かって水を掻き、飛沫を上げながら水面から飛び出す。そして再び前へ。二秒に一回くらいの割合で繰り返されるその動き、海面を掻き回し、材木が軋む音。オデット号はゆっくりと棧橋から離れていった。

「艦長。ガリー号と、マゼンダ号とも出航しました」

副長の報告にキュラソーは舌打ちした。

「同時か、残念だ。一番に出港しなかったのだがな」

「船も同じ、乗組員の質もほぼ同じです。よくやっている方ですよ」

「決して同じではないぞ。私が指揮するからにはこの艦は最高でなくてはならない。カイペリーニャは甘やかしていたようだが私は違う。びしびし行くからそのつもりでいたまえ」

「……………はう」

エラール戦隊に所属する三隻は、ほぼ同時に離岸してナスタから発航した。

港を出て湾内に入ると旗艦ガリーを列基準艦として、単縦陣の艦列が組まれる。オデットは二番目。ガリーと殿艦マゼンダに前と後ろから守られて進むことになる。

「出港しちゃいましたよ、江田島さん。どうしたらいいんですか？」

徳島が言う。

「こうなったら沖に出る前に海に飛び込んで強行脱走です。チャンさん、いいですね？」
 だがチャンは波の静かな海面を見て顔色を青くした。

「い、嫌だ！」

「どうしてですか？ 外務省のスタッフが船をチャーターして待ってくれてるんです。今海に飛び込めば帰れるんですよ！」

「だ、ダメだ。飛び込むのは無理。俺は泳げないんだ！」

「なんですって？」

すると徳島が励ました。

「大丈夫です。溺れないように俺達が支えますから。ね、統括」

「はい、我々は十分に水泳訓練を受けていますので大丈夫です。貴方は力を抜いて浮かんでさえないばい。お任せください！」

だが、チャンは恐怖に顔を引き攣らせ、二人が請け合っても断じて肯んじなかった。

「仕方ありません。徳島君」

「はい」

徳島と江田島が二人掛かりで無理矢理舷側に引つ張っていく。

だがチャンは必死に抵抗した。

「チャンさんだけ、この船に残るって言うんですか？」

「そうです。このままではほぼ間違いないく戦闘に巻き込まれることになってしまっんですよ」

ここまで大胆に騒げば、嫌でも下士官や士官達の目を引く。たちまち警衛係下士官がやってきた。

「お前達、一体何をしている？ 出航配置が解かれたらお前達の居場所は厨房のはずだぞ。とっとと仕事に戻れ！」

「いや、別にその俺達は……」

徳島はうまい言い訳が思いつかず窮してしまった。

「まさかと思うが、怖じ気付いて逃げ出そうなんて考えてるんじゃないだろうな？ そんなことしやがったら俺達がぶつ殺すぞ。いいか、お前達には目を付けておくからな！」
ここまで警告されたら、徳島も江田島もこれ以上のことは出来ない。そうこうしてい

る間にも、オデット号はナスタの港から離れていったのである。

* * *

戦隊司令のエラール艦長は旗艦ガリー号に嚮導旗きようどうしほを掲げると、ナスタ湾の出口を塞ぐケルウ島西側のバスケス水道を通りぬける針路を取った。

風はやや斜め後ろからのものが優勢だが、時々微妙に変わることがある。しかし三角の帆を最大に広げれば十分な速度を得られるので、漕役奴隷達には休息が命じられた。

彼らは皆、漕役室の己のベンチで極太の櫂を枕にして突っ伏していた。外洋に出てしまえば彼ら漕役奴隷にはしばらく出番がない。あるとすれば、戦う時と無風か逆風で帆が役に立たない時、そして入港時だろう。

今度は甲板で働く水兵達が汗を流す番なのだ。

「いいかね、副長。私の名を戦隊司令の記憶に刻み込むのだ。可能な限り速く進め！」

「嚮導艦を煽ると仰るのですか？」

「そうだ。やれないとでも？」

「了解ラッホしました、艦長！」

通常、列艦は嚮導艦の速度に合わせて進むものだ。そのために全力を出さず帆を縮めたりすらする。しかしキュラソー艦長は、出せる限り出せと命じた。指揮系統上では戦隊司令が上位者だが、プリメーラを擁するこのオデット号こそが戦隊の主役であるという驕りがあるのかもしれない。

操船を任された当直士官は風を受ける帆の^{はま}み具合を睨みつつ、掌帆長に帆の調整を命じた。

掌帆長が水兵達に指示して、風の力を最大限に受け止める帆の微妙な向きや張り加減の調整をしていく。おかげで水兵達は甲板上を走り回り、索を引っ張って帆の向きを変え、あるいは索を緩めという作業に追い回されていた。

「引け！ 一杯に索を引け！ 力を抜くな！」

帆走中は甲板員として働く徳島の握る綱が、ミシミシと音を立てて暴れ回る。

風を一杯に孕んだ帆は凄まじい力で水兵達を^{ほんろう}翻弄していた。だが、その力こそがオデット号を大海へと向かって走らせるのである。

「ケルウ灯台までの距離五百！ 正横を通過します！ いま！」

見張りをしている見習い士官が報告する。

「艦長、まもなくバスケス水道を抜けます」

キュラソー艦長と副長は、艦尾楼甲板からケルウ島の灯台の位置を確かめると、嚮導旗を翻しながら単縦陣の先頭を進む戦隊司令の意図について語り合っていた。

「ふむ。どうやら我らが戦隊司令殿は順風を利用し、南堡礁^{みなほしき}と東堡礁の隙間が作るトルル水道から外洋へ出るつもりだな」

オットマイヤー副長が台上の海図を見て首肯した。

「速度を優先するならば当然の選択です。風向きが変わりやすくなる夕方までには海賊達が出没する海域から離れてしまいたいのでしよう」

「しかし天象に素直に従う進路は他者に予測されやすい。そこをどう解釈するかね？」

「新鋭艦揃いの我が戦隊なら、海賊と出会っても正面から打ち破るのは容易いと考えておられるのでは？」

キュラソーが「うむ」と唸った時、望遠鏡を覗き込んでいた士官が声を上げた。

「船守りからです！ 左舷の方向に、三隻の所属不明船を見ゆ！」

上空から周辺海域の監視を強めていたオデットが、手旗信号で空から合図してきたのだ。

「左舷だと？ 随分といい加減な報告をする船守りだな……」

「あ、いえ……ええと、左方七点に船影三つと言ってきています！」
通信士官がオデットからの信号を読み取った。

『点』とは、舳先の方向から正横の九十度までを八つに分けた方角表示のことである。拳を突き出すように腕を伸ばした時、拳一個分の幅が概ね一点となる。ここでは七点だから、真左から拳一個分前に船影があるという意味になる。

キュラソー艦長と副長は左の舷側に歩み寄ると左七点の方角に望遠鏡に向けた。蟲獣の殻を磨いた、歪みの大きいレンズに映るのはまだ水平線だけであった。

「船影はどちらに進んでいる？」

通信係の六肢族水兵が手旗で問い合わせる。するとすぐにオデットからの返事があつた。

『まっすぐ近付く』。繰り返します。『まっすぐ近付く』です！

「艦楼の見張りからは？」

マスト上の見張りからすぐに返事があつた。

「まだ見えませ〜ん！」

キュラソー艦長は副長に相談した。

「艦楼から見えないとなると、距離は十リーグ（約十六キロ）以上先ということになる。

立ち読みサンプル はここまで

水平線の向こうから真つ直ぐにこちらに向かつてくる所属不明船。君はどう思うかね？」

「所属が分からないということそのものが、奴らの素性を表しているかど？」

「海賊だな。しかし我がティナエ海軍も舐められたものだ。同数で張り合おうとは」

「艦長、戦隊司令は何も言っていないが、戦闘配置を命じますか？」

「そうだな……」

キュラソーは少し考える。だがその時横合いから声が投げかけられた。

「待ちたまえ、艦長。我々はここで戦うべきではない」

艦尾楼甲板に現れたのは、プリメーラと共にシーラーフへと赴く外務卿がいむきょうのカベルネであった。

「この戦隊には、プリメーラ姫をシーラーフへ届けるという任務がある。戦いよりはそちらを優先するべきだと私は考えるが？」

「カベルネ殿、我々軍人は指揮官の命令に従わなければならない立場にある。この場合は戦隊司令官のご判断がそれです。貴重なご意見は承りましたが、後はどうぞ居室でお待ちください」

「それが戦隊司令官よりもさらなる上位者からの意思だとしてもかね？」

「なんですって？」